

2015.12.20 待降節第4主日

## マリア、エリサベトを訪ねる

ルカによる福音 1:39-45

そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。そして、ザカリアの家に入ってエリサベトに挨拶した。マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。エリサベトは聖霊に満たされて、声高らかに言った。「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いでしょう。」

### 説教

きょうの福音はイエス生誕の見せ場には含まれている、いわば谷間の場面です。直前の福音では「大天使ガブリエルのお告げ」があり、直後の箇所では「マリアの賛歌」があります。きょうの福音は「お告げ」と「賛歌」には含まれた「訪問」の箇所、でも食べ物のサンドイッチにたとえれば具のところ、実はとてもおいしいところです。

**そのころ、マリアは出かけて、急いで山里に向かい、ユダの町に行った。** 1:39

「そのころ」とは天使ガブリエルに懐妊を告げられたのちを差しています。「ユダの町に行った」そこはマリアの実家のあるナザレより105km南にあるエン・カレム（カレム=ぶどう畑・エン=泉という意味）という町、現在、町の頂上には聖母訪問教会が建っている町をさしているようです。

エン・カレムはイスラエルのエルサレム地区にある村で、エルサレムの西郊外にある。エン(ein)はヘブライ語で「泉」、カレム(karem)は「ブドウ」の意味で、「葡萄園の泉」という意味である。アラブ人によって建てられた石造りの家々が、杉と松の木々が生える丘に囲まれた美しい村である。1948年の第一次中東戦争で

アラブ人はこの村から逃げて、その後モロッコとルーマニア出身のユダヤ人が住むようになった。

6世紀ごろより、ここは『新約聖書』の「ルカによる福音書」1章39節に書かれている、ザカリア、その妻・エリサベツ、彼らの子供・洗礼者ヨハネが暮らしていた「ユダの山里」であるということで、巡礼者が絶えなくなった。

エン・カレムには次のような施設があることで有名である。

- ・洗礼者ヨハネ誕生教会 (Church of St. John the Baptist)
- ・聖母マリアがいとこのエリサベツを訪ねた所に建つ訪問教会

ウィキペディアより引用

マリアは懐妊直後に 105km はなれた「ユダの山里の町」にひとりで？行きます。

**あなたの親類のエリサベトも、年をとっているが、男の子を身ごもっている。不妊の女と言われていたのに、もう六か月になっている。ルカ 1:36**

マリアはこうガブリエルに告げられたので確かめにいったのでしょうか？

**マリアの挨拶をエリサベトが聞いたとき、その胎内の子がおどった。ルカ 1:41**

「胎内の子がおどった」どうもマリアのエリザベト訪問はただ単純に親戚のおばさんに逢いにいったのではなく、エリザベトの腹の子 = 洗礼者ヨハネにマリアの腹の子 = イエスが会いに行ったと解釈することを記事は狙っているようです。エリザベトのお腹の子どもがおどった = つまり胎動した。胎動を初めて感じる時期は、早い方だと妊娠 16 週頃、一般的には妊娠 20 週前後の妊娠中期で、遅い方だと妊娠 22~23 週頃にだそうです。エリザベトは高齢出産と説明されているので 6 ヶ月目（妊娠 24、25 週ごろ）に初めての胎動を感じたのかなあ。

わたしはマリアが妊娠しているのに長旅（たぶん実家から 100 キロていど）に出たのはちょっと不自然かなともおもっていたのですが、妊娠初期も初期、みごもった直後に出かけて、3 ヶ月後に実家に帰ったとあるので理屈としても納

得できます、そう不自然なことでもありません。事実と信仰はしばしば気になります、このマリアの訪問に関しては事実としての不合理はありません。

**マリアは、三か月ほどエリサベトのところに滞在してから、自分の家に帰った。**

ルカ 1:56

産まれる前から母の腹にいたところからイエスを信じていたヨハネですが、彼は獄中からイエスがメシアかどうかを確かめに人を遣わしたと福音書に書いてあります。

**ヨハネは牢の中で、キリストのなされたことを聞いた。そこで、自分の弟子たちを送って、尋ねさせた。「来るべき方は、あなたでしょうか。それとも、ほかの方を待たなければなりませんか。マタイ 11:2-3**

ヨハネもまだまだだ（信仰が足りないな）と読むのではなく、信仰は揺れ動いてこそ本物だということです。揺れ動かない信仰こそがまだまだどころか、うそなのではないかとも思います。洗礼者ヨハネは再びイエスを確信した、イエスはメシア、キリストだとヨハネは最後の最後に再び信じたのです。

**「あなたは女の中で祝福された方です。胎内のお子さまも祝福されています。わたしの主のお母さまがわたしのところに来てくださるとは、どういうわけでしょう。あなたの挨拶のお声をわたしが耳にしたとき、胎内の子は喜んでおどりました。主がおっしゃったことは必ず実現すると信じた方は、なんと幸いです。」**

1:42-45

エリザベトの賛歌はいいですねえ。きょうの第四アドベントの肝（きも）です。

主のお母さまとマリアを賛美しているようでもあり、ともに神から使命を与えられた子を宿す母としての誉れも控えめに表現しているようでもあり、味わい深い賛歌です。マリアの挨拶の声は親戚のおばさん（エリザベト）へ向けられたものですが、彼女たちが宿すお腹の子どもたち同士の挨拶、そうエ

リザベトは感じたのでしょうか。お腹の子どもがおどったとエリザベトは賛美しています。神はお高くとまっているお方ではなく、わざわざ出向いてきてくれるお方だということが、エリザベトと胎内の子ども、洗礼者ヨハネをとおしてわたしたちは知ることができます。ヨハネは後に自分のことを靴の紐もとくに値しない者だと謙遜をこめてイエスのことを賛美しています。とるに値しないわたしたちにも主は手をさしのべてくれます、そのことをヨハネの言葉からも確信することができます。

わたしたちキリストを信じる者たちの願いは主とともにいることです。いつでもどこでも、いっしょにいてくれる主がわたしたちを励まし慰めてくれることを信じることです。わたしたちがマリアさまを好きなのは、マリアが主と共にいるお方だからです。イエスを懐妊し出産した。マリアは自分のお腹に主を宿し、そしてお産みになられたお方だからです。文字どおり神とともにいる、インマヌエルがお腹に、そして心に宿っておられる方だからこそあこがれます。

きょうの主日を、クリスマスを抑えたアドベントの一日を、主の平和のうちに過ごすことができますように。そして福音にあずることができたわたし達だけではなく、主の日を向かえる世界中の人々が主に祝福されますように。人がその腹の中に、心の中に宿しているものが、期待に喜び踊る日でありますように。

-----